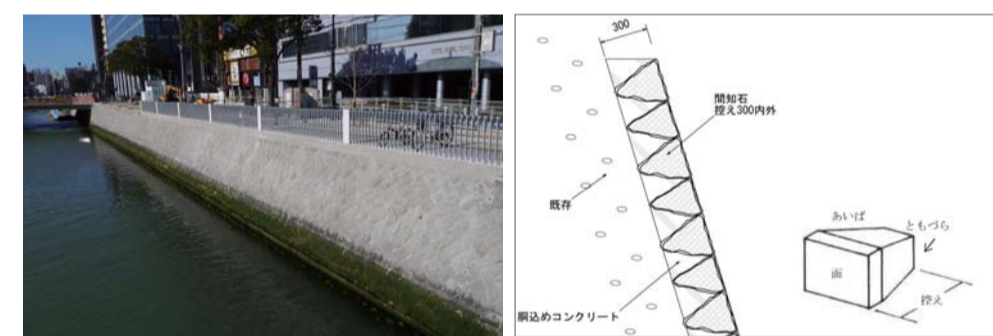


冷泉を織る - 50年を紡ぐランドスケープデザイン -

背景・目的

福岡市は、九州地方の経済・文化・交通の中心地であり、同地方最大の人口を擁している。また全国的に人口が減少傾向にあるなかで、本市は今なお増加を続けており、平成 25 (2013) 年には推定人口が 150 万人に達した。こうした背景には、九州新幹線全線開通や高速環状線供用開始、国内外 LCC 航空開設などといった都市機能の強化に伴う「住みやすい都市」としての評価が高まってきている証左ともいえる。さらに、都市緑化の基本計画において本市内に拡がる公園緑地や神社・寺の緑地等の『緑の拠点』を整備する方針が示されており、現在大濠公園～天神中央公園、東公園などが挙げられている。加えて公共施設空間のハード面の計画として、福岡市営地下鉄七隈線延伸事業を始め、那珂川護岸修景事業、明治通りの拡幅事業、春吉橋の架け替え事業および国道道路の拡幅事業などが計画されており、今後これらの事業が竣工することで、本市内の特に天神 - 博多間における『ヒトの流れ（回遊）』がより盛んになることが期待される。



▲ 那珂川護岸修景事業



▲ 明治通り

▲ 国道道路

しかし一方で、本市においても少子高齢化による年齢構造の変化は年々顕著に現れてきており、生産年齢人口の減少に伴う今後の市場縮退は避けられない。さらに、博多祇園山笠や博多どんたくといったハレの文化、本市を象徴する屋台や歓楽街・中洲における夜間の賑わいが失われることも懸念されている。



▲ 博多祇園山笠

▲ どんたく



▲ 清流公園の屋台

▲ 中洲のネオン

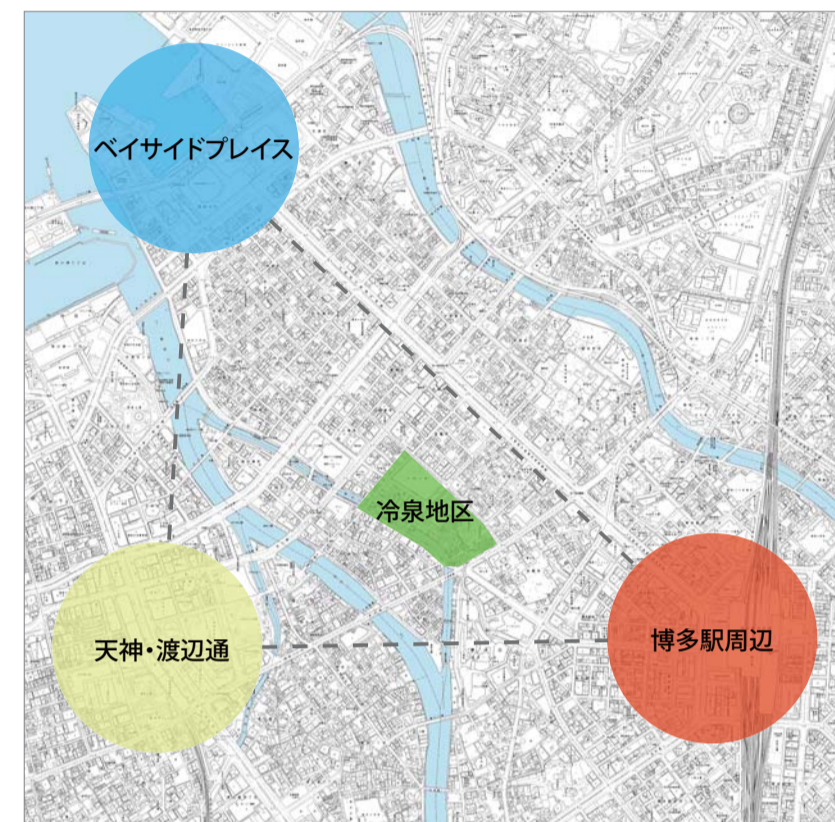
冷泉地区の現状

対象地である冷泉地区は、本市の広域交通拠点である天神・渡辺通、博多駅周辺、ウォーターフロントの 3 地区を結んだ三角形のほぼ中心に位置している。またこの場所は、冷泉公園内の戦災慰霊碑、櫛田神社や承天寺などの寺社仏閣といった歴史・文化遺産が残されているだけでなく、博多祇園山笠や博多どんたくの出発地であるなど、祭事の拠点としても活用されており、50 年後の福岡市の持続的発展に寄与しうる可能性を有している。

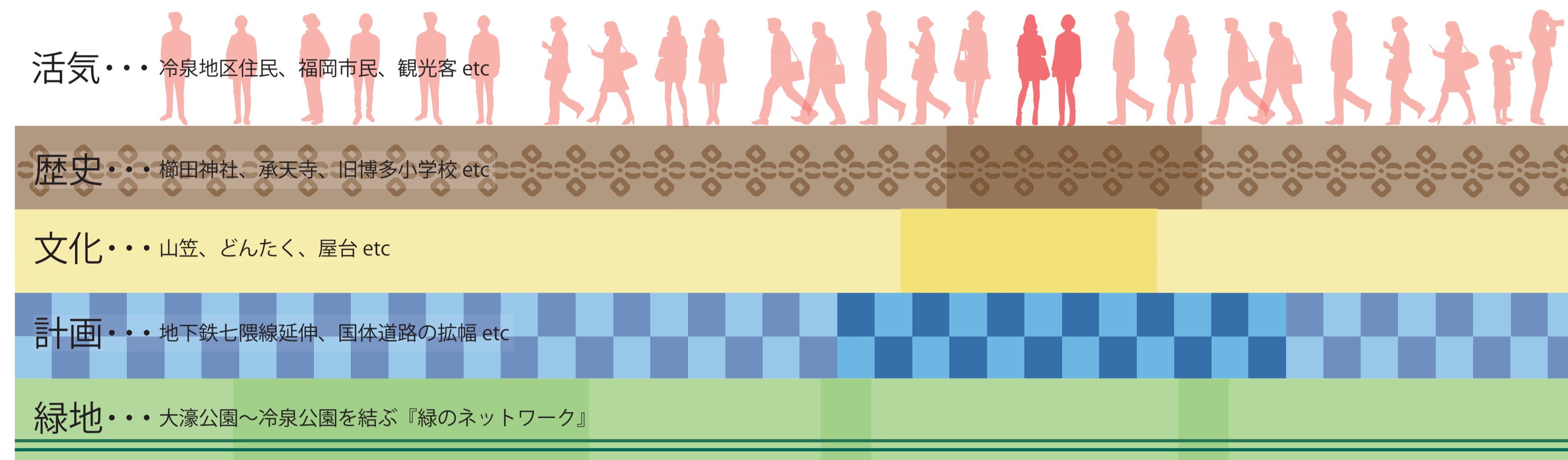
冷泉地区の今後の課題

冷泉地区の今後の課題は、以下の 4 点であると考えられる。

- 旧博多小学校校舎や櫛田神社、その他周辺建築物の老朽化
- 人口減少や少子高齢化に伴う川端商店街のシャッター通り化
- 冷泉地区の歴史および文化に対する認知度の向上
- 博多 - 天神間における回遊性の断絶



人々の冷泉地区に対する「記憶」や「歴史」の継承



▲ 冷泉地区に提案する 4 つのコンセプトを博多織にて表現。織り重なる帯のように冷泉地区の魅力紡ぎたい。



▲ 冷泉地区の現状写真

コンセプト

歴史【歴史を伝える】

福岡市は商業都市としての印象が強い一方で、中心市街地から少し外れると由緒ある寺社仏閣が並ぶ街並みも多く残っている。そこで、旧博多小学校をリノベーションし歴史を伝える場として設えることで、観光客だけでなく冷泉地区住民も周辺の歴史・文化遺産を巡り、学べる拠点にする。

文化【記憶をつなぐ】

これまで受け継がれてきた博多祇園山笠や博多どんたく、屋台等の文化を今後も残していくためには、それらを継承していく人および場所が必要である。そこで、旧博多小学校の校舎やグラウンドを地域文化の交流・継承の場とし、『ハレとケ』両方の文化と人々の記憶をつなぐ空間を作り上げる。

計画【都市とともに変わる】

50 年後の福岡市を考えるうえで、現段階で構想されている計画（那珂川護岸改修事業、福岡市営地下鉄七隈線延伸など）は勿論、地域の世代交代や建物の更新などの『都市の変容』を念頭に置く必要がある。そこで、今後の福岡市において行われる計画を 10 年ごとで段階的に追い、それらを踏まえた冷泉地区の 50 年後の姿を考える。

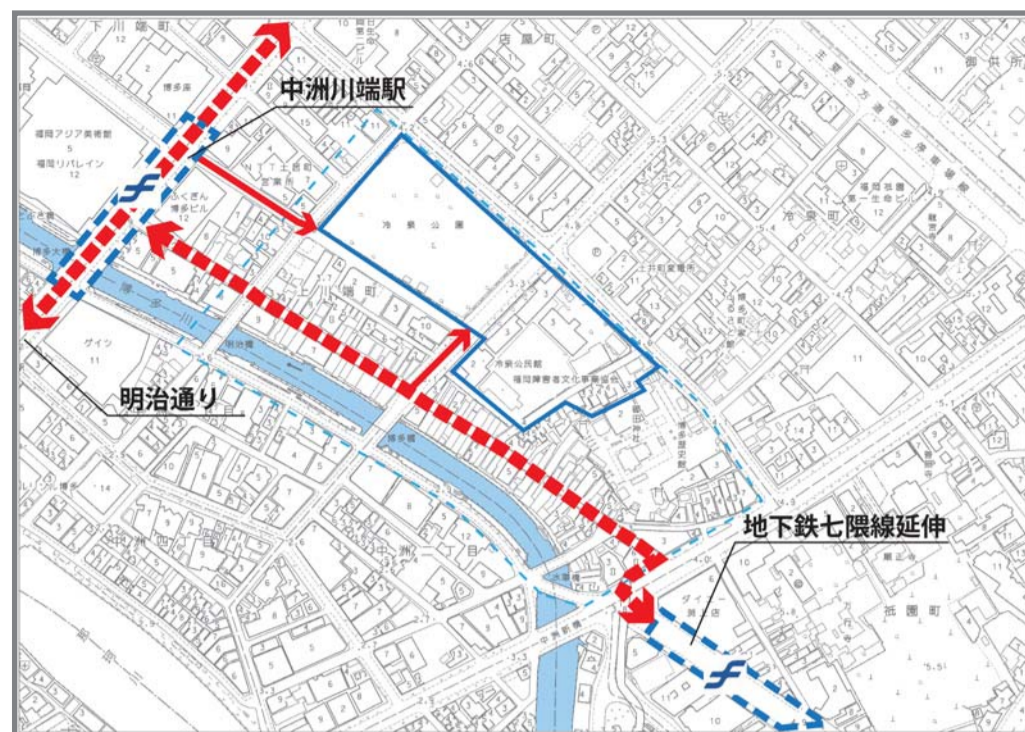
緑地【緑をつなぐ】

福岡市には西公園、大濠公園、舞鶴公園、警固公園、天神中央公園、東公園などの『緑の拠点』が点在しており、これらをつなぐことで緑のネットワークを基軸に都市の骨格の再構築を試みる。そこで、これらをつなぐ新たな『緑の拠点』として冷泉公園を位置付けるとともに、その場所を訪れる人にとっての憩いの空間をデザイン提案する。

未来予想図ー冷泉地区の50年ー

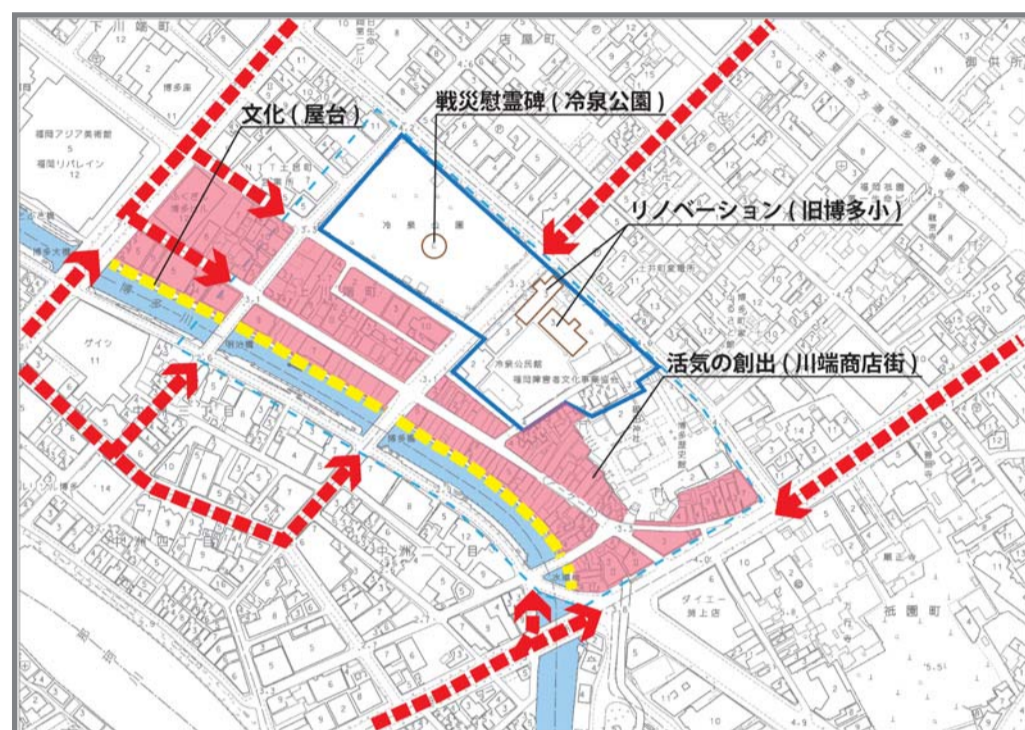
10 years later

明治通り沿道等の建て替えにより、天神地区から冷泉地区への交通量が増加する。また平成32年には、福岡市営地下鉄七隈線延伸事業に伴い、天神南駅 - 博多駅間 (1.4km) の開通が予定されている。それにより、キャナルシティ前に駅が設置されることが計画されており、同駅と地下鉄空港線・中洲川端駅を結ぶ、川端商店街を多くの人々が行き来する。



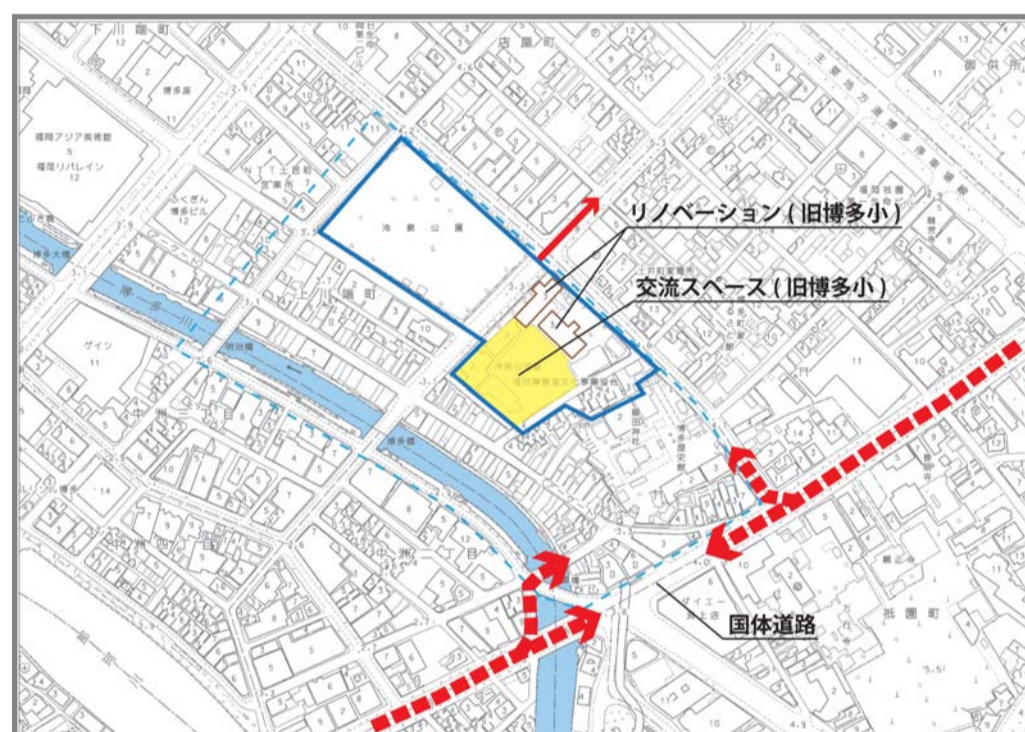
20 years later

福岡市の人口および観光客増加に伴い、冷泉地区へのビジターが増加する。また冷泉地区の既存建築物の建て替え時期に伴い、旧博多小学校等の建物がリノベーションされる。一方、福岡の文化的な象徴でもある屋台が衰退している現状も踏まえ、旧博多小学校ならびに冷泉公園付近に屋台特区を設けることで文化・歴史を継承する拠点となる。



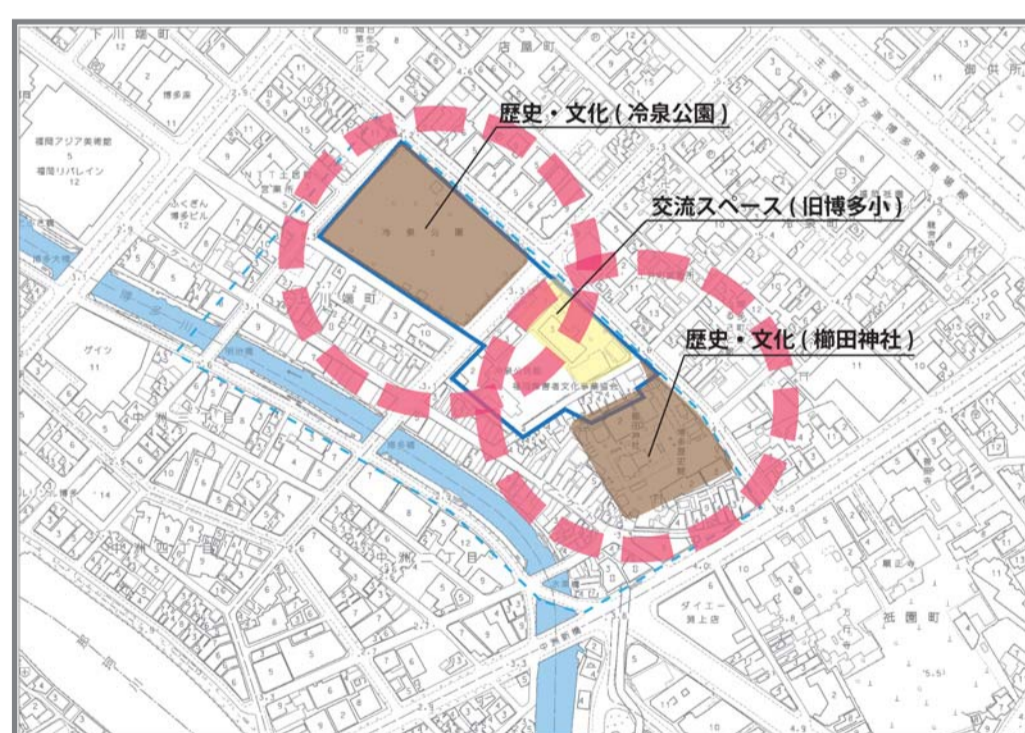
30 years later

福岡市の人口はピークを迎え、博多 - 天神間といった市街地内の回遊性はより重要視される。国道道路の拡幅に伴い冷泉地区への回遊性の向上、さらに周辺地区に現存する歴史・文化遺産に触れる機会も創出される。また旧博多小学校のリノベーションと共に、交流の拠点として主要な施設を一箇所に集約することで、周辺地区との歴史・文化の回遊性の連携を高める。



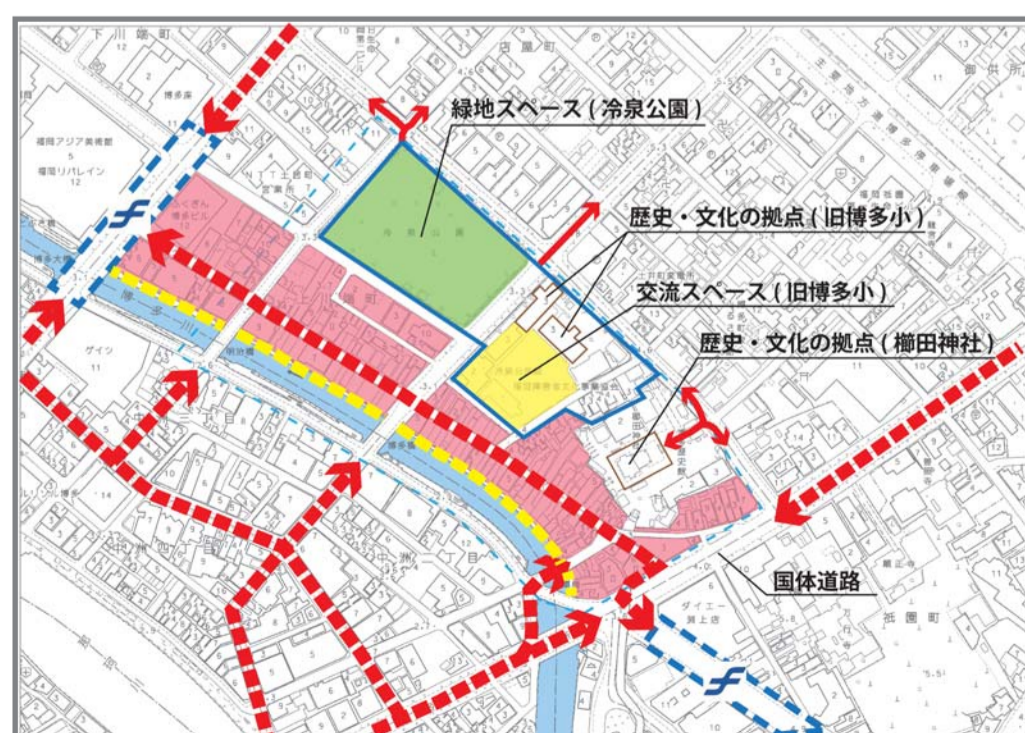
40 years later

冷泉公園の100周年及び博多総鎮守にふさわしい神社を目指す榊田神社の1300周年を迎え、榊田神社祇園例大祭の賑わいにも拍車がかかり、冷泉地区はより活性化が図れる。また20 years later でリノベーションされた旧博多小学校は、地域の交流スペースならびに冷泉地区や他の地区への案内所や歴史・文化遺産を巡る出発拠点として一層活用される。



50 years later

福岡市営地下鉄七隈線延伸事業、那珂川護岸改修事業、国道道路の拡幅事業などの事業が竣工している。これらの事業が交通機関の利用や博多・天神地区からの回遊を創出させ、併せて対象地の改修を行うことで、①福岡市内における『緑のネットワーク』の形成②歴史・文化の回遊を促す出発拠点③地区住民を始めとする多様な人々の交流拠点となる。



緑地とのつながりー冷泉公園ー

▲旧博多小学校と冷泉公園をつなぐ一体的なエリアへ。貫かれた歩道は、那珂川および博多川の線形を模して配置



▲交差点からおもいで広場につながる象徴的な緑道



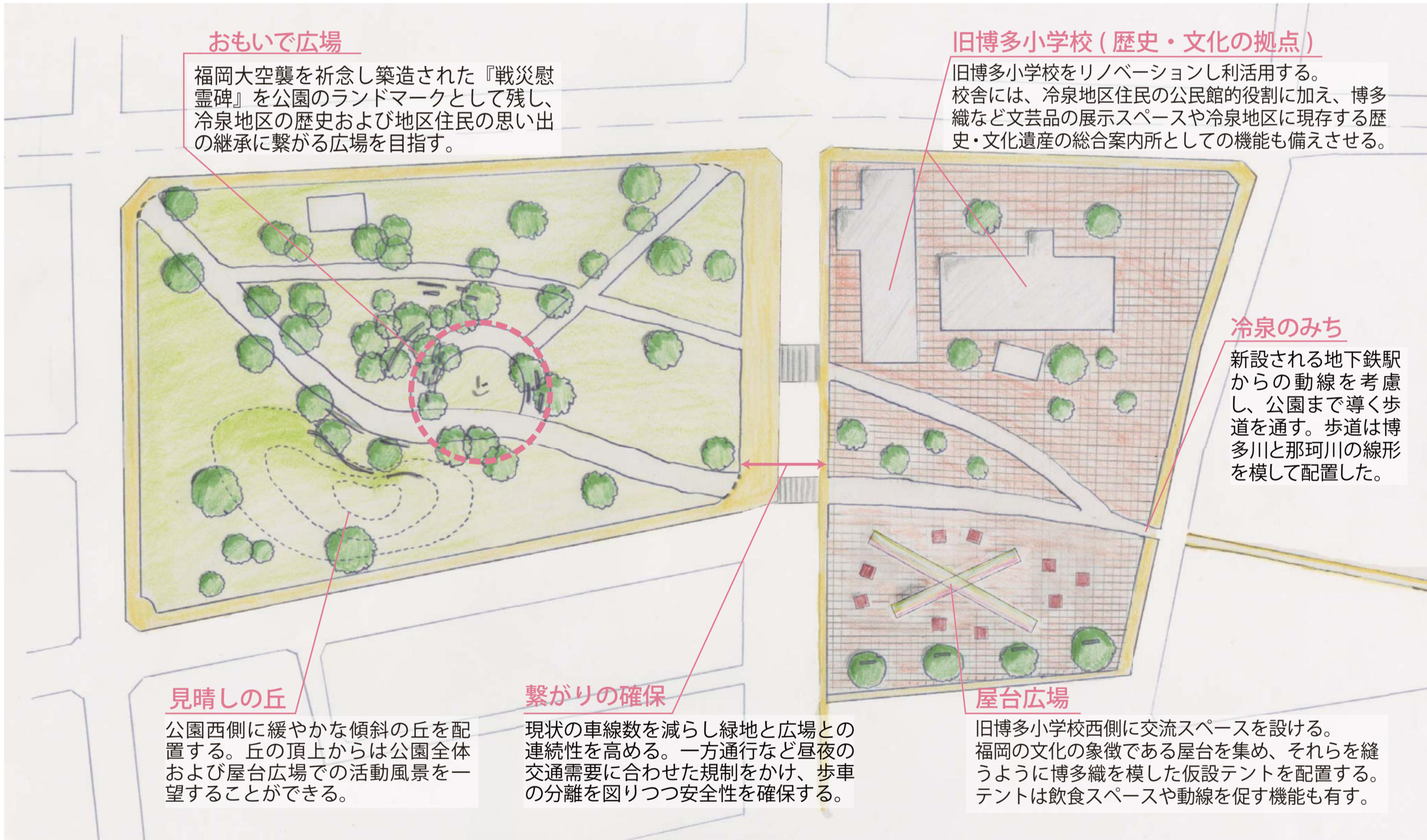
▲森の中に設置された憩いのベンチ



▲屋台広場へとつながる冷泉のみち



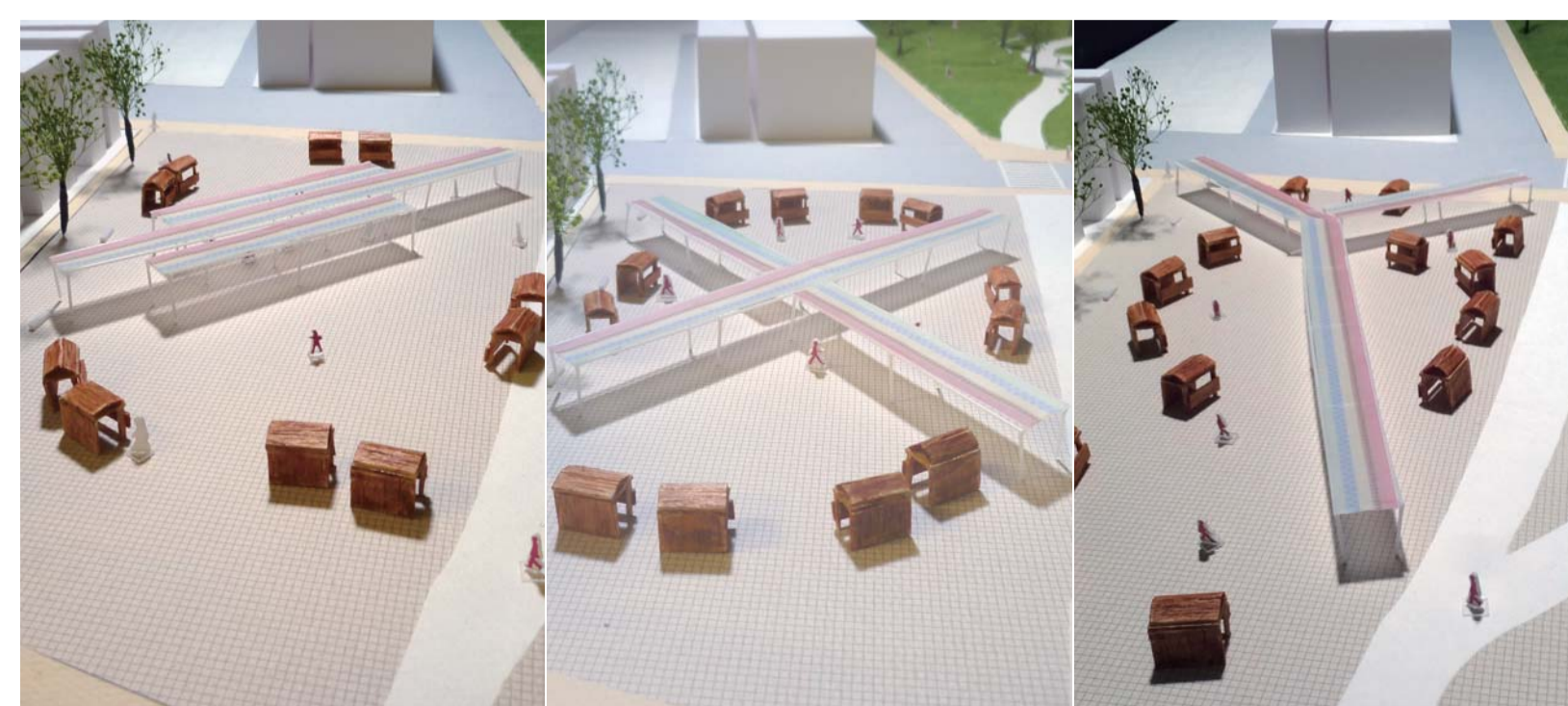
▲屋台広場から見える見晴しの丘



▲冷泉サイトプラン



▲見晴しの丘から一望できる屋台広場



▲屋台広場。博多織を模したテントは市民の利用に併せて可変性を確保



▲新設される地下鉄キャナルシティ前駅から見た冷泉のみち

おもいで広場
福岡大空襲を祈念し築造された『戦災慰霊碑』を公園のランドマークとして残し、冷泉地区の歴史および地区住民の思い出の継承に繋がる広場を目指す。

旧博多小学校 (歴史・文化の拠点)
旧博多小学校をリノベーションし活用する。校舎には、冷泉地区住民の公民館的役割に加え、博多織など文芸品の展示スペースや冷泉地区に現存する歴史・文化遺産の総合案内所としての機能も備えさせる。

冷泉のみち
新設される地下鉄駅からの動線を考慮し、公園まで導く歩道を通す。歩道は博多川と那珂川の線形を模して配置した。

見晴しの丘
公園西側に緩やかな傾斜の丘を配置する。丘の頂上からは公園全体および屋台広場での活動風景を一望することができる。

繋がりの確保
現状の車線数を減らし緑地と広場との連続性を高める。一方通行など昼夜の交通需要に合わせた規制をかけ、歩車の分離を図りつつ安全性を確保する。

屋台広場
旧博多小学校西側に交流スペースを設ける。福岡の文化の象徴である屋台を集め、それらを縫うように博多織を模した仮設テントを配置する。テントは飲食スペースや動線を促す機能も有す。